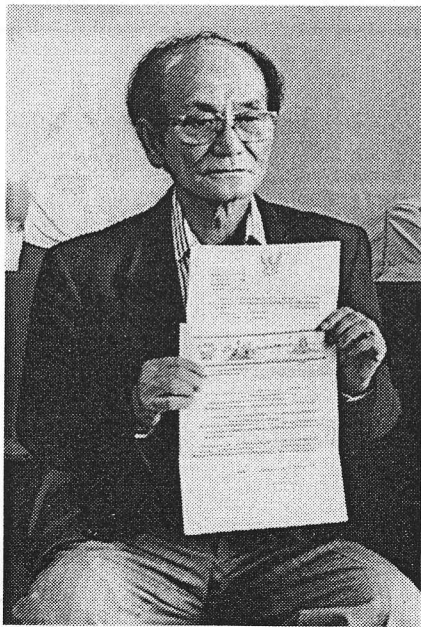


泰緬鉄道犠牲者弔い28年

永瀬さん 名誉市民



名誉市民に選ばれたとの文書を手にする永瀬さん

死の鉄路 友好の舞台に

タイから手紙

映画「戦場にかける橋」で知られるタイ・ミャンマー(旧ビルマ)間を結ぶ泰緬(たいめん)鉄道建設にかかわり、戦後、四万数千人といわれる犠牲者の慰霊や、貧しい子供たちのための援助を続けている岡山県倉敷市大島、無職永瀬隆さん(70)が、タイのカンチャナブリー県と同市から名誉市民に選ばれたことが、六日わかった。永瀬さんは今月下旬に現地へ出向き、記念の盾を受け取る。

太平洋戦争中、永瀬さんは同鉄道の建設現場で、憲兵隊の通訳として従軍。収容所や現場で働く連合国軍の捕虜や徴用された現地住民らの監視役をしていた。厳しい労働と食料不足の中で、捕虜らは栄養失調、病気になる、バタバタと倒れていた。その苦む姿を見ながらも、スパイ容疑をかけられることを恐れ、何もできなかった。終戦直後は散乱した遺骨の収集にも加わった。

昭和三十二年に復員した

が、忘れられないのは捕虜や労働者らのこと。日本軍による残虐行為も数多かったことから、少しでも償いたいと、同三十九年から毎年のように現地へ出向き、犠牲者の慰霊を続けてきた。

同六十一年には鎮魂のため、同市にクワイ河平和寺院を建設。六十三年にはタイの貧しい子供たちのためにクワイ河平和基金を設立、医療機器の援助などを行っており、これらの活動が「タイと日本の友好関係は「戦争の舞台を平和の舞

に尽力した」と評価された。泰緬鉄道は全長四百五十キロ。ミャンマーへの陸上補給路確保のため建設され、一年三か月という異例の速さで完成した。この突貫工事に、連合国軍の捕虜や現地住民ら十二万人余が投入され、四万数千人が栄養失調や伝染病で犠牲になったといわれる。

台に変えた」と記されており、永瀬さんは「運動が認められてうれしい。今後は基金を増やすなど現地の役に立ちたい」と喜んでいる。

永瀬さんによると、現地の記録では住民三十万人が従軍、犠牲者は十五万人以上と紹介しており、難工と犠牲者の多さから「死の鉄路」とも呼ばれたという。